

# 関西学院大学 研究成果報告

2020年 4月 30日

関西学院 院長殿

所属： 社会学部  
職名： 教授  
氏名： 李建志

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国：中華民国） <input type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国：） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間
研究課題	東アジアにおける韓国朝鮮の思想、文学研究の動向の比較調査 —韓国、日本の韓国文学研究と台湾の韓国文学研究の交流と相互連関の可能性の模索
研究実施場所	中華民国新北市 淡江大学校外国語文學院日語日文学系 (外国語学部日本語日文学科)
研究期間	2019年 4月 1日 ～ 2020年 3月 31日 (12ヶ月)

## ◆ 研究成果概要 (2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

まずは台湾における韓国のイメージと日本のイメージの比較検討を行った。そこで最初に現地の淡江大学でゲストスピーカーとして教壇に立ち（無給）、日本における在日朝鮮人とは何なのか、誰なのかについて話し、学生たちからの反応を見た。台湾は日本や韓国より複雑な社会であり、先住民（現地のことばでは「原住民」）、内省人（台湾でもともと暮らしてきた漢族）、そして外省人（蒋介石率いる国民党とともに台湾に乗り込んできた人びとの子孫）という重層的な「民族」構造がある。内省人には日本との混血も多く、日本への視線は決してマイナスなものばかりではない。このような複雑な状況であるからか、日本における在日朝鮮人の立ち位置について話すと、多くの学生が「自らのルーツ」について考えを深めることができた。現地の教員からうかがうに、この体験と考察は、本学の紀要論文集「関西学院大学社会学部紀要」第132号（2019年10月）に「『在日朝鮮人』は誰のことか？：台湾淡江大学での実践例」と題して発表した。

さらに、台湾での朝鮮人あるいは韓国人のイメージの「悪さ」が多少目立ったため、いったいなにゆえにこのような状況にいたったのかを考察することとした。一例を挙げると、1895年に日本軍による台湾接収と、それに対する客家の抵抗運動を描いた映画「一八九五」では、彼らの抵抗運動を「祖国への愛」という側面を前面に押し出して制作されている。にもかかわらず、台湾接収を担当した北白川宮能久親王の描き方も、慈

愛に満ちた立派な幹部軍人として描くという矛盾した（少なくとも、私のような在日朝鮮人の立場からは理解しづらい）ストーリーとなっていることをつぶさに見た。北白川宮は当時、陸軍幹部であり、台湾接收の重責を担って台湾入りしたが、現地で亡くなっている。皇族の殉職はこれが最初であり、そのために「バランス」として、客家の抵抗だけではなく、北白川宮能久親王も秀でた人間としたのではないかと、現地の教員から教示されたが、納得はいかなかった。そこで、台湾における日本皇族の描かれ方について論文をしたためた。これが「関西学院大学社会学部紀要」第134号（2020年3月）に寄稿した「李垠光臨台湾」である。この論文では日本の皇族が台湾をどのように訪れていたかを詳細に追ったものだが、李垠という現在の私の研究テーマである朝鮮最後の王が台湾をどのようなルートでまわったのかに関してより注目しながら論じた。すると、日本の皇族の多くが台湾を訪問していたこと、そして朝鮮王族である李垠も日本皇族に準ずる立場でやはり台湾を訪れていたこと、しかし彼とのもっとも近い位置で仕事をしている日本人次官である篠田治策は、台湾を「朝鮮より劣っている」と論じながらも、台湾の「民情が（朝鮮に比べて）穏やかである」と主張されていることを知った。これらは現在私が書いている長編の評伝「朝鮮最後の王李垠」の昭和編でも見ることとなるだろう。当然、篠田の台湾観もより深めて考察することとする。

このような朝鮮と台湾の相互に交錯する視線を、韓国でいまや「英雄」として顕彰されている趙明河について考察したのが、本学の論文集である「言語教育研究センター研究年報」第23号（2020年3月）に発表した「研究ノート 台中不敬事件」である。台中で怒った実際の不敬事件（テロ事件）であり、事件を起こした趙明河は死刑になっている。趙明河は韓国で「建国勲章」をとっているのだが、彼のことを当時の記録などで読む限り、どう考えても思想的な深みのある行動ではなく、やけになって行ったものでしかない。細かな事例は拙著論文にゆずるが、趙明河は朝鮮で仕事を得られず、日本に渡るがやはり仕事は無く、台湾は豊かであるときいて台中に渡ったが、やはり貧しい生活が続いた。そこで、自殺しようとしてモルヒネを大量吸引した彼が、死にきれず、当時台中に来ていた皇族である久邇宮邦彦王にナイフを投げて捕まったというおそまつなものであった。こんな人物を英雄視するのは、韓国社会が「反日行動」を取れば評価されるという単純な構図でアジアを見ているからに他ならない。それは、客家の愛国心を描きつつも、日本皇族を慈愛に満ちた人物として描く「バランス感覚」とは対角線上にある。もちろん、台湾の日本に対する描き方が正しく、韓国が間違っているという単純な比較をすることは控える必要があるが、問題は趙明河程度の暴漢を英雄にしてしまう韓国の思考方式は是正されなければならないということである。

このように朝鮮から見た日本、台湾から見た朝鮮と日本、日本から見た台湾と朝鮮という複眼的な見方をしてきたが、この複眼的な見方を獲得できたことは、私が今回台湾に送っていただいたことによる大きな成果のひとつだと断言していい。これは、いずれ書き続けられる「朝鮮最後の王李垠」の第3巻、第4巻で反映されることとなる。

私は文学の研究者である。上記のような思想研究もその範囲内だと考えている。しかし、毎年度、ひとつぐらいは韓国文学あるいはその周辺のものを分析するという、文学研究に近い論考を発表する必要があると考えている。留学中にもその問題意識を決して失ったわけではない。そこで、論文「三つの『オールド・ボーイ』」（「言語と文化」第23号、2020年3月）を書いた。これについても触れたい。これは、日本のマンガ「オールド・ボーイズ戦記」（土屋ガロン原作、嶺岸信明画）を、韓国の実力派の映画監督パク・チャヌク（박찬욱）が映画化し、さらにこの韓国映画をスパイク・リー監督がハリウッド映画としてリメイクするという、三つの国・言語にわたるメディア・ミックス状況が見てとれる。私のほんらいの専門は「比較文学」であり、この立場から日・韓・米にわたる「オールド・ボーイ」の描き方について論じたのである。留学中の研究課題からは少しだけ距離があると思うが、しかし韓国映画が欧米でどのように受け入れられているのか、そして日本マンガが韓国や欧米でどのように扱われているのかを知るために非常に有効だったと考えている。詳細は拙著論文にゆずるが、日本と韓国という比較だけではなく、米国を視野に入れたメディア・ミックス研究は、台湾・韓国・日本という錯綜する状況を知る上でも有為な補助線となったと考えている。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。